

「安政の大獄」と「桜田門外の変」

⑮

史料B 桜田実記

篠田久次郎 編輯

弥生の雪 桜田実記 全

⑯

弥生の

ゆき

さくらだ

實記

篠田仙果 録

方圓舎清親 画

當世堂 梓

弥生雪 桜田實記 全

東京 篠田仙果 編

時はいつぞや、万延

元年

東都

櫻

田

御門外

にて、前代

未聞の事

件あり。その顛末を 尋るに、嘉永六年六月三日

北亞墨利加合衆国より、交易をひらかんため、ペルリと云う

⑰

使者として、軍艦・汽船四艘にて

浦賀港へ乗りこんだり。これに

依て非常のため、徳川政府

諸侯に下知し、海岸をかため

させ、儲、殿中にて諸役人種々

評議ありての上、アメリカの使節へは

追て返書つかはさんと申しければ

提督ペルリは、其期を約し、一旦

退帆に及びける。かく政府にては

交易の儀に付、猶又評定ありし

をり、水戸黄門齊昭卿、諸役人に

うち向ひ、是迄我国ゆるさざる

異国と交際相成まじ、此後

亜船来りなば、すみやかに打払ひ

日本の武勇のほど知らせ

くれんと仰せあるを、諸役人は

只管に異国人を忌み

恐れ、今兵端をひらき

なば、砲術すくれし

アメリカ力兵数万騎

にて攻

来らば

いかにしてふせぐ

べき、和議なすに

⑱

如はなしと、水戸老侯の勇ある言葉を用ゆる者は

なかりけり。○安政五年七月八日

徳川將軍家定公

わづか一日病給ひて

薨去あるこそかなしけれ。

しかるに、いまだ若君

なければ、水戸老侯の

八子なる一ツ橋慶喜殿

を御養君にいたさんと

評議、概畧(略)

さだまり

けるを、

大老職

井伊掃部

の頭、おもふ

しさいある

にあること

にや、これ

を遮ぎり

同意せず、

本年十

二歳なる紀州家の菊千代

殿を御養君となし、一個(己)の

はからひを以て、交易をゆるし、水戸の

⑲

老公齊昭公を国許へ

禁個(固)なしけり。

さるほどに

元老井伊氏

の勢ひ左

ながら

旭日の

のぼる

ごとく▲□

▲□

我意の

ふるまひ多かりけるが、

ある時、赤坂なる紀伊家へ

参りし帰り、喰違御門を

通行の際、傍への土手の上に茂れる

樹木の内に、ドウとひゞきて、弾丸忽ち

飛来り、井伊氏の乗たる駕籠を打抜しが、

弾丸は刀の柄に止り、其身は恙なしといへども、ソレ曲者よと

駕籠脇の土、八方に手分をなし、一人

の曲者を捕縛なし、

種々拷問いたせしかど、更に白状せざりしとき。後にきけば

⑳

此ものは、もと水戸の産にして、飯田一郎と云し者とき。

○こゝに水戸家の浪士ども、同所長岡の廃寺に

集会し、天下国家のためなれば、掃部頭を

討とらんと密事を談合

なしにける、佐野竹之助

人々にうちむかひ、方今の

時勢、彼

方にも

用意あるよし、仕損ては

恥辱なり、熟々思じゆうしゆ

慮をめぐらすに、

三月三日、登城のせつ、途

中に待受謀るべしと

いふに、一同膝をうち

然らば斯々かやふにせんと

手配万端

申合せ、支

度とへのへ、二人三人、目立ぬやうに

水戸を立出、いづれも江戸へ

着せしかば、黒澤忠三郎・

佐野竹之助・大関和七郎の

三人は、麻布廣尾

に剣術道場を開きゐる、もと薩州の藩、有村治左衛門

方に至り、此度の一議をかたりしかば、治左衛門、小をどりなし

⑳

我、先年遊歴のをり、はか

らず水府の老侯に咫尺しせきし、

恩遇一日も忘るひまなし、我も

老君の赤志を継、各々と

力を合せ、彦根中將を

討取べし、乍去當今は

市中探索きびしければ、

うかと談合なり

がたし。幸ひ品川宿

山崎屋といへる茶屋は

拙者懇意のものなれば、

彼が方にて集

会せんと。

其翌日、

有村は品川なる山崎屋へ到り、表向は

無尽と披露し、一統の人と終日酒宴

をもよほしつゝ、いよく三月三日

とさだめ、徳川政府の探索

方にあやしまれ

ては相ならずと、

一旦所々にわかれ候て

ひそみ、三月二日、愛宕

山にて再び会合いた

さんと、頓やがて諸方へ離散なしけり。

⑳

さて

三月二日となれば、

所々にひそみし

水府の浪士、

姿を扮し、

ちらほらと愛

宕山へ集りしが、

杉山弥一郎は門前にて

額をもとめ、齋藤監物筆を採て、額の裏へ

願書を認め、外見をはぐかりて、白紙にてうらを張

金子を添て額を納め、南無勝軍地藏大ぼさつ、

我々が念願成就なさしめ給へと、一同に礼拝し、

夫より翌朝の手はづをさだめ、愛宕をば下山なし、

其夜も同じく身をひそめ、明れば上巳の節句ながら▲

▲曙七つと思ふ頃より、

いと珍敷降雪は霏々

紛々と咫尺もみへず

浪士等は大いに

勇み、天われくが

☒

櫻田さして忍び行。

○茲に彦根中將は

辰の刻の太鼓と

ともに、供がた

そろへ、邸を

いで、櫻田見

附の此方まで

駕籠をはや

めて進みしに、

杉山弥一郎・

稲田重藏

手にく願書を▲

▲捧げつゝ、大音

をふり立て

おそれながら

御大老へ

願ひ上

奉る。

主家

の大

事に

候ぞと

呼はりく

近付を、

駕籠

わきの

衛士らは

つねの輿訴と

思ひしかば、らう

ぜきすな、扣へよ、

と兩人を制する

をり、有村治左衛門・

黒澤忠三郎・佐野竹之助・

大関和七郎・

⑳

井伊氏を

罰する次

第をいと

くはしく認め

たる書を一封づゝ

懐中し、赤合羽

に身をやつし、

☒ 赤心を あはれみ

雪の助け を得たる

なりと、愛 宕山にて待

合せ、同盟 の者揃ひしかば

㉑

廣岡千次郎○岡部

三十郎○山口辰之助

等は、無二無三に

先供へ乱入せり。

井伊家の供方

大いに驚き

それ曲者、

討止よと

銘々に▲

清三郎○廣木松之助

○鯉淵要人○林忠左衛門

等は、あと供へ切入たり。

それ跡へにも敵ありと

前後にわかれ戦ひ

たれば、駕籠傍り

に人なければ、稲田重蔵

かくし持たる

手鑑をしごき、井伊氏の

乗たる駕籠へ突かけ

たり。彦根の近臣、これを見て、重蔵に討て懸るを

②5

蓮田市五郎・

廣木松之助・

関矢之介

等、稲田を

たすけ、雪を

蹴立、火花を散して

戦ふたり。此時、佐野

竹之助は、余の戦ひ

に目をかけず、かこの

戸テウと押やぶり、

彦根中将の首

をあげ、佐野竹之助

▲ひし

めけど、雨

装束を

付たる故、思ふごとくの働き

できず、さて又、森五六郎○森山

繁之助○齋藤監物○増子

中将殿を討取

たりと大音に

呼はるを、彦根の

臣日下部某、

中を飛んで

馳来り、當

の敵遁さじと

竹之助に切て

懸るを、勇猛名代

の有村次左衛門、

竹之助に助力なす ▲

②6

飛がごとくに

走さりける。

今ははや、心安しと

老中脇坂家に至り、

此日の事件を自訴

なす者あり。また

細川家にいたる

もありけり。中

▲かゝる所へ、岡部三十郎

かけ来りつるに、佐野

氏手疵をうけしと

見つけたり。その

首拙者にわたし

給へと、いふより

早く、くびを

うけとり、

龍の口の

方を

さし

にも、有村治左衛門は

其身も数ヶ所の重疾を負ひ、割腹に

及び、存命の浪士は各々刑に付にける

弥生雪 櫻田実記 了